

日本性科学会 ニュース

第38巻第2号

令和元年(2019年) 6月

発行人:大川 玲子 印刷所:(株) 絢文社

第39回日本性科学会学術集会 / 第20回日本性科学連合性科学セミナー

会場:鹿児島市医師会館(鹿児島市加治屋町3-10) 第1会場 大会議室 第2会場 中会議室
*鹿児島中央駅近くに鹿児島県医師会館がございます。お間違えの無いようご注意ください。
学術集会会長:医療法人玉昌会高田病院泌尿器科科长 内田 洋介
学術集会テーマ:新時代の性科学を模索する~明治維新ゆかりの地にて~

2019年10月6日(日)

- 第1会場 9:00~ 9:10 開会の辞
9:10~10:30 シンポジウム1「HPV ワクチンのこれからを考える」
座長:中川 昌之(鹿児島大学泌尿器科)「HPV ワクチン接種後神経障害の実際とその治療」
高嶋 博(鹿児島大学脳神経内科)「自分で考え自分で決める。HPV ワクチンは最高の性教育ツール」
高橋 幸子(埼玉医科大学産婦人科)
10:40~12:00 シンポジウム2「歴史の中のLGBT」
座長:針間 克己(はりまメンタルクリニック)「日本史の中のLGBT(のような人たち)」
三橋 順子(明治大学文学部)「歴史から見つめる鹿児島の性」
東川隆太郎(かごしま探険の会)
13:00~14:55 シンポジウム3「セックスワーク:論じられてこなかった視点とは何か」
座長:東 優子(大阪府立大学)「性産業における〈ヘテロセクシュアル男性研究の不在問題〉」
赤谷まりえ(編集ライター)「セックスワーカーのリスク・アセスメントのリテラシー」
要友 紀子(SWASH 代表)「セックスワークの世界からみるトランスジェンダーの性」
畑野とまと(トランスジェンダー活動家・TGJP 代表)
15:05~15:55 特別講演「生と性と死を考える」~お坊さんが行う中学校性教育授業を通して~
座長:永井 敦(川崎医科大学泌尿器科)
演者:古川 潤哉(浄土真宗本願寺派)
16:00~17:00 ユースセッション「次世代に繋ぐ性科学 ~令和の性科学を語る~」
座長:大川 玲子(日本性科学会理事長)
柳田 正芳(若者世代にリプロヘルスサービスを届ける会)「性のあいもこいも in かごしま」
柳田 優依(鹿児島大学大学院保健学研究科助産学コース・かごしまピア研究会)
「令和時代のセックスミュージアム:令和の次世代にバトンを渡すために」
イロタカ(セックスミュージアム設立準備委員会)「これからのSEX界を担う若手は何を考えているのか」
岡野めぐみ(みんなのSEXを考える委員会)
17:00~17:10 閉会式
第2会場 9:10~ 一般演題

2019年10月5日(土)

- 午前 第1会場 第11回GID学会エキスパート研修会
第2会場 SEE (Sexuality Education & Empowerment) 性教育アカデミー
「こんなとき、どうする? どうみる? 性にまつわるさまざまなトラブル
~学校現場での被害・加害を中心に」(対話型・ワークショップ)
進行役:野坂祐子(大阪大学)・吉田博美(駒澤大学)・東 優子(大阪府立大学)
午後 第1会場 第20回JFS(日本性科学連合)性科学セミナー「性の健康 ~平成から令和へ~」
○合同懇親会
場 所:PARTY HALL HINATA(鹿児島市東千石町3-41) 懇親会終了後20:30頃から同会場にて
○夜の市民公開講座 TENGA Night Special 「お医者さんとみんなで語る!性の健康とマスターベーション」
司 会:赤谷まりえ(編集ライター)内田 洋介(学会長)
講 師:福元 和彦(福元メンズヘルスクリニック院長)
早乙女智子(レイ・パストゥール医学研究センター研究員)
今井 伸(聖隷浜松病院リプロダクションセンターセンター長)
ゲスト:小室 友里(ラブヘルスカウンセラー)加藤 鷹(加藤鷹商店)桂ぼんぼ娘(落語家)

学会事務局 〒892-0824 鹿児島市堀江町5-1 医療法人玉昌会高田病院泌尿器科
ホームページ: jsss39.umin.jp
演題募集期間:5月8日(水)~7月5日(金)
学会日程が鹿児島市桜島で行われる3万人規模の音楽フェスティバルと重なります。
お早めの交通・宿泊のご予約をお勧めします。

Vol. 38

№.
2

日本性科学会

〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F

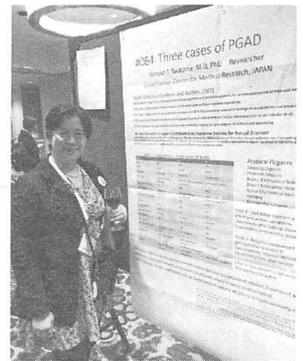
TEL・FAX 03-3868-3853

2019年ISSWSH 参加報告

主婦会館クリニック産婦人科 早乙女 智子
偉生会身原病院産婦人科

WAS (World Association for Sexual Health: 性の健康世界学会) に参加し始めて10年以上経った。知り合いも増え、ホームのような安心感がある。何より、1995年の横浜大会で Unmarried Women and Induced Abortion というタイトルでポスター賞を受賞している。

ISSWSH (international Society for Study of Women's Sexual Health: 国際女性性機能学会) は以前から気になっていたが、日程がいつもプライベートと合わず断念していた。今年は、何となく慣れた WAS だけでなく他流試合がしてみたくて、思い切って出かけることにした。演題は今更ながらの PGAD (Persistent Genital Arousal Syndrome 持続性性喚起症候群、ピーギャッド) の3例である。原因はまだ明らかではないが、脊髄や脳のどこかの障害により、性的刺激なしに不随意にオーガズムが襲ってくる疾患群である。PGAD という名称も、また変更される可能性がある。私は3例の経験があり、1例はほぼ完治、1例は長期フォローのち脱落し、もう1例は経過観察中である。そのうち2例は、大学病院で見放されたケースであった。PGAD という名称に落ち着いてから20年経ち、もう解決済みの古い演題かなと思っていたが、私の他にも3題の PGAD ポスター発表があった。私のケースはたまたま3例ともが性的なトラウマを抱えており、自己罰的な受け止めをしていた。かつては Tarlov Cyst という脊髄の腫瘍が示唆されていたが、原因疾患はもっと多様である可能性がわかってきていて、PGAD は現象だけを見ている可能性も示唆されている。



ご丁寧に3日目の朝6時から8時のセッションは、丸々 PGAD がテーマだった。そして、PGAD の自助グループのリンダとエブリンとも出会うことができた。リンダは、整形外科医のキム先生のところで脊椎のマイクロサージェリー治療を受けることになっていた。

ISSWSH の今年のテーマは、It takes 2 to Tango (タンゴを踊るには二人必要) であった。カップルの視点で語る重要性は今更強調する必要もないと思うが、女性が日本よりはるかに自立していると思われる欧米でも、性交痛に悩む女性が多いのには驚いた。別料金で受講する Instructional course は、ホルモンの話、カップルセラピー、がん治療の性的副作用、温熱療法などのエネルギー治療の4部構成だった。

全体的なプログラムは、Vulvodynia (陰部痛)、Vesibulodynia (前庭痛) と PGAD に集約されており、WAS のような学際的な多様性よりは、医学的な演題に集約されていると感じた。日本女性が我慢強いのか、白人の皮膚が弱いのか、性交頻度が高いためかわからないが、問題として取り組む姿勢の真剣さに考えさせられた。

個人的には、自分の関心事である PGAD のセッションが大変印象的だった。海外ではインターネット調査などで、1%程度は当事者が居ると考えられている。また、当事者は、日本でもそうだが、家族や友人から孤立しがちで、自助グループの重要性が強調されていた。先に述べたリンダとエブリンは、精力的な活動が学会で表彰されていた。孤立しないためには、当事者が集まるところや話せる場が重要で、時にどうしようもない症状であっても、仲間の言葉で助けられることがある。やはり、日本でも調査をしたり、自助グループを支援したり、難病指定してもらうなどのアクションが必要だと感じた。

国際学会の好きなどころは、本当に様々な国の方と交流できることだ。今回、久しぶりに韓国の泌尿器科医のパク先生にも会え、メキシコの知人にも会えた。誰もが、自分らしく自由に振る舞う様子を見るだけでほっとする。Instruction Course の最後には、Husband Replacement Therapy (夫取り換え療法!) なんてジョークも飛び出す。私も周りに合わせて笑ったふりから、リアルタイムで笑えるようになってきた。

Komisaruk 先生や、Cindy Meston 先生など、あこがれの先生にも会え、何より、Goldstein ご夫妻やその仲間が PGAD チームとなっていることを知った。私の学位論文となった SEXUAL MEDICINE に掲載された Sexual Dysfunction and Satisfaction in Japanese Couples during Pregnancy and Postpartum を書く際にも参考にした論文の著者グループにリアルで会えて、こういうところで学生でいられたら良かったのと思った。

初めて行ったアトランタの観光は半日だけだったが、コカ・コーラ博物館、人権博物館、アクアリウムを駆け足で回り、FOX シアターという古色蒼然とした歴史あるところで、ジミ・ヘンドリック・エクスピリエンスのギターパフォーマンスを楽しみ、そのあとは、定評のあるジャマイカ料理を堪能した。

この3月ようやく博士の学位を頂き、まだ駆け出しの研究者だが、学位取得から8年は若手枠の科研費申請ができる。自分なりに、これからも性の不思議に取り組んでいこうと決意を新たにしている。



日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定、並びに更新規定（日本性科学会雑誌vol. 1に掲載）に基づき、2019年度の新規資格認定並びに更新資格認定を行います。

尚、資格認定申請期間は、新規・更新ともに8月1日～8月31日です。新規資格認定希望者は、申請書類を日本性科学会事務局までご請求下さい。資格更新該当者には、事務局より7月中旬に更新申請書類を郵送いたします。

いずれの場合も資格認定規定を御熟読の上、ご申請下さい。御不明な点は学会事務局にお問い合わせ下さい（TEL 03-3868-3853 受付時間 月・水・金 10:00～13:00）。

書籍紹介

『中高年のための性生活の知恵』

日本性科学会セクシュアリティ研究会【著】

突然ですが、誰もが知っている国民的アニメ「サザエさん」の波平さんとフネさん。何歳かご存知でしょうか？番組ホームページでは、波平さんは54歳、フネさんは50歳と紹介されています。失礼ながら年齢よりすごく老けていると、現代を生きている私たちは思ってしまう。

でも、サザエさんのTV放送が始まったのは50年前。思い返せば私が子供の頃（約40年前）、50代だった祖父母は磯野家の二人と似たようなものでした。言葉は悪いですが、すでに枯れたような感じ。祖父母の家で性的なものは全く感じられませんでした。

サザエさんのTV放送が始まった翌年、謝国権先生の大ベストセラー「性生活の知恵」が200万部を突破しました。結婚して初めてセックスを経験する人がまだまだ多かった時代、結婚後の性生活のノウハウを医学的に解説し、若いカップルの性のバイブル、性の教科書となったのでした。ただ、さすがの謝国権先生も、「性生活の知恵」でセックスを覚えた世代が中高年になった現在、新たな「性生活の知恵」を必要とすることは想定していなかったのではないのでしょうか。

個別には例外もあるでしょうが、50年前の中高年と比べ、現代の中高年は見た目も若々しくなり、実際

に体力を維持している人も多いと思います。気力も体力も維持されていれば、当然性生活も維持したくなるでしょう。ところが、日本には、特に若者を中心に「高齢者はセックスをしない（してほしくない）」という空気があることが否めません。「中高年の性の実態」がよくわからないことが原因と考えられます。

この「中高年の性の実態」を調査するべく、日本性科学会セクシュアリティ研究会は、2000年と2012年に中高年の性に関する大規模なアンケート調査を行いました。この調査で得られた「中高年の性の実態」を参考に、性の臨床と研究を通して得た知見を加え、中高年の夫婦やカップルが読んで、本当に役立つ性生活の知恵をまとめた1冊がこの「中高年のための性生活の知恵」です。いわゆるセックスのテクニックではなく、どのように男女がふれあい、どのように性を楽しめばよいのかというところに一貫して重点が置かれ、年齢とともに変化していく男女の心と体、中高年の性の楽しみ方について具体的にかつ実践的に解説しています。

性を楽しむ権利は、老若男女誰にでもあります。本書は、中高年だけでなくこれから中高年となっていく若い方々にも読んでいただきたい1冊とも言えます。

第24回性の健康世界学会（24th WAS <https://www.was2019.org>）（第2報）

開催地：World trade center, Mexico City 期日：10月12～15日

早期登録は7月末まで（WAS member を選ぶと USD600）。抄録の延長締切は6月末。

日本からの参加者も複数査読を経て続々と発表の連絡がきています。

日本性科学連合（JFS）企画の学会ツアー（10.11成田出発10.18着）

お問い合わせは JFS 事務局（E-mail：info@jfs1996.jp）へ、概要チラシは日本性科学会にもありますのでおたずね下さい（文責：大川）。